

### ADVANレーシングタイヤインフォメーション

### 2008年 SUPERGTシリーズ第9戦(最終戦)

2008.11.9

### FUJI GT 300km RACE



横浜ゴム(株)が「ADVAN」ブランド誕生から、ちょうど30年目となる08年にチャレンジするカテゴリーのひとつがSUPER GTシリーズだ。全9戦で開催され、海外のサーキットも舞台とする国内最高峰のシリーズにおいて、ADVANはGT500クラスに出場するTOYOTA TEAM TSUCHIYA、そしてKONDO RACINGとのパートナーシップを継続。それぞれ表彰台の中央を目指す。

TOYOTA TEAM TSUCHIYAは土屋武士と石浦宏明を起用してECLIPSE ADVAN SC430を、またKONDO RACINGは、ジョアオ・パオロ・デオリベイラと荒聖治のコンビで、WOODONE ADVAN Clarion GT-Rを走らせる。

激戦を繰り広げてきたSUPER GTも、ついにこれが今季ラストレースとなった。舞台である富士スピードウェイでは過去2年間、最終戦が開催されており、レースはいずれもドラマティックな展開となっていた。特に印象深いのが、GT300クラスのタイトル争い。

ポイントリーダーとして挑んだのは、2年とも紫電を操る高橋一穂/加藤寛規組だったが、その結末は誰も忘れてはいまい。ドライバーズタイトルを2年連続で、しかもトップと同ポイントでありながら、優勝回数の差で逃しているからだ。昨年はチームタイトルこそ手にしたものの、その頃の心境は想像にあまりある。

今年もブリヴェKENZOアセット・紫電の高橋/加藤組は、王座獲得の権利を持って最終戦に挑む。ただし、これまでと異なるのは、追う立場であるということ。トップとの差は7ポイントで、ウエイトハンデは候補4チームの中で最も少ないことから、可能性は十分に残されていると言えよう。また、前回のオートポリスで今季初優勝を飾っている、デザインADVAN Zの青木孝行/藤井誠暢組にも18ポイント差ながら、逆転の可能性は残されている。

惜しむらくは、前回のリタイアでコンケルパワータイヤサンボルシェ、ORC両宮

SGC-7が権利を失ってしまったこと。だが、この最終戦で雪辱を果たしてくれば、結果として同じADVANユーザーである、紫電やデザインZの援護ともなることだろう。前回の予選トップ、JIM CENTER ADVAN F430、そしてウェッズスポーツIS350などにも、その期待がかかる。なお、コンケルパワーは山路慎一に代えて、今回はドミニク・ファーンバッハーを起用する。

今回用いられるタイヤは、前回のオートポリスで用いられたものに比べ、大きな変更はないものの、季節を考慮して低い温度域にも対応するコンパウンドも、バックアップとして用意されている。



一方、GT500クラスだが、前回のオートポリスでは2台とも無念の結果に終わっている。ECLIPSE ADVAN SC430はスーパーラップ進出を果たし、9番手から決勝に挑んだものの、12位でゴール。そして、WOODONE ADVAN Clarion GT-Rも予選13番手から順位を上げていったものの、ステアリング系にトラブルを抱え、その修復に時間を要したことから、16位という結果に留まった。

だが、ウエイトハンデなく挑めることから、まさに有終の美を飾るに絶好の状況となっているのは事実だ。今回のタイヤは、今まで使用されたものに比べて大きな変更はないものの、むしろ性能的な目標として低荷重時の接地を稼ぎ、ドライバーがよりマシンを動かしやすいよう、常に開発を続けてきたという背景がある。富士には、その要素に合致するコーナーが多いことから、大いに狙い目のコースであり、タイヤとしても集大成となることが期待されている。2チーム揃って表彰台に上がることも、決して不可能ではない。

今回のレースでGT500クラスに用意されたドライタイヤは、ソフト、ミディアムの2種類。練習や予選時のドライバーのフィーリングが重視されるが、このところの温度低下を考慮すれば、ソフトがメインになって使用されることとなるはずだ。今回は約1400本のADVANレーシングタイヤが準備される。



#### 2008年 SUPERGTシリーズ第9戦用ADVANタイヤラインアップ

		GT500	GT300
ドライ用 スリック	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (S, M)	2種類 (SS, S)
	サイズ	330/710R18、330/710R17	280/710R18、280/680R18、 280/650R18
ウエット用 レイン	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (S, M)	2種類 (S, M)
	サイズ	330/710R18、330/710R17	280/710R18、280/680R18

30<sup>th</sup>  
ADVAN  
Since 1978

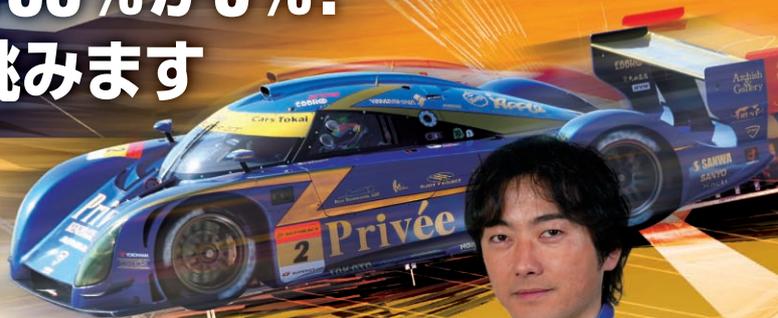
# タイトル獲得の可能性は100%か0%! リラックスして最終戦に挑みます

もう最終戦を迎えるわけですが、今季はここまで未勝利なんです。チーム全体としてかなり頑張ってきたんですが、まわりもとてもレベルアップして来ていて、うちも毎戦良いところにはいるものの、勝つまでには至っていないという感じです。開幕戦の鈴鹿と、第7戦ももてぎで2回2位になってはいるんですが、感覚としては開幕戦のほうがまだ勝ちに近かったかな。第7戦のもてぎは、チームとしてはまったく予想していなかったというか、表彰台は無理かなと考えていたレースだったんです。むしろ優勝に近かったレースといえば、鈴鹿1000km。実際にはあれが一番勝ちを狙っていたレースでした。ですから今季はシーズンを通じて、なかなか思うように行かなかったレースがあったかと思えば、思いのほか上手く行ったレースもあったりして、ちょっと難しいシーズンだったかもしれませんね。

紫電も3年目となるわけで、マシン全体がかなり完成されて来ていの中で、ヨコハマさんがどんどんスペックを上げたタイヤを開発してくれているので、そういった部分でのパフォーマンスの上げ幅はありますが、まあ頭打ちに近い状況ではあります。クルマとして大きく性能を上げる部分がないというか。加えてライバルのマシンがどんどん速くなって来る状況でしたから、今年は特別性能調整も絡んでドライバーへの負担は大きかったように思います。

昨年僕たちはチームタイトルを獲りましたが、その一方で過去2年連続、最終戦の富士ではドライバーズタイトルを獲り逃しています。今年も状況的には厳しいでしょうね。しかし、チームも3年目ということもありますから、タイトルを争うということに対する必要以上の緊張感はないんですよ。とにかくポジティブに、“攻める”というスタンスで富士に臨めそうです。高橋（一穂）さんもタイトル争い3年目ですから結構リラックスしている感じですし、チーム内の雰囲気の良い状態で富士に行けると思います。

紫電は富士が苦手だと言われている割には、そこそこ成績は良いんですよ。今年も性能調整を受けているマシンも多いので、できるだけそういったマシンのペースに巻き込まれないように、できるだけ予選では前にいたいですね。レースになれば、ドライバーのレベルが揃っていたり、ピットストップ作業が早いなどといった要素が絡んだりして、必ずランキング上位のチームが上に来る。と考えると、ウチだけが大量得点を獲って差をつける、という展開はなさそうかなと。いつものように、ポジションひとつで天地がひっくり



## 2 加藤 寛規 プリヴェKENZO アセット・紫電

かとう ひろき  
1968年2月23日生まれ、神奈川県出身  
90年にF100サーキットカートレースを始め、92年からフォーミュラトヨタに参戦。94年に全日本F3にステップアップ、98年にはマカオGPで6位入賞を果たす。その後、ル・マン24時間を筆頭に、内外のトップカテゴリーで活躍。GTレースには98年から出場、現在のカーズ東海ドリーム28には06年から所属し、高橋一穂とともに紫電をドライブする。

返るようなシビアな戦いになるんじゃないかとも思います。

ウエイトに関して、ライバルの方が重いんですが、それでも彼らは確実にレースをまとめる力があるので5位ぐらいには入ってくる。となれば、もう自分たちは表彰台しかない。今季ここでもギャングル的な要素を含んだレースの組み立てをしたこともあったんですが、もう最終戦はそれしかないですね。普通に行ったら勝負にならないんで、そのためのタマもヨコハマさんに用意してもらって、強力なバックアップを受けるという明るい材料もあることで、ちょっとみんなでも頑張っちゃおうかなと(笑)。

タイトルの可能性は……、どうでしょう。まあ100%か0%じゃないですか(笑)。作戦が上手く行けばタイトルが獲れるでしょうけれど、ちょっとでもミスがあればその瞬間にダメになる。でも、そういった緊張感を持って戦えるって楽しいですよ。毎年のように最終戦でタイトル争いができるというのは幸せなことですし、皆さんの応援のおかげ。本当にありがたいことですよ。

## 二度あることは三度あるなんてご免! 三度目の正直、石の上にも三年を狙う

### カーズ東海ドリーム28 / ムーンクラフト 渡邊 信太郎 チーフエンジニア

前回のオートポリスは、うちだけ見れば、3位は最高の結果でした。金曜日のクラッシュはダメージが足りずにまで及んでいて、本来ならスベアパーツに交換するんですが、リタイアした鈴鹿で使っちゃったので、作っている最中だったんです。仕方なく06年の仕様で改めたんですが、当時と今ではダンパーからして違うものを使っているんで、ただつければいいわけではなく、いろんな擦り合わせをする必要もありました。その状況の中で表彰台に上がったんですから、確かに喜んでいいんですけど……。

問題は、タイトルを直接争う相手も、ウエイトが厳しいのに結果を残していたことです。もっと救済を受けているチームには頑張ってもらいたかった(笑)。過去2年、ドライバーズタイトルは同点で涙を飲んだんですが、今年また同点になりそうだったら、もう引きますよ! みんなから二度あることは三度あるなんて、言われ続けているんで。

あ、でも三度目の正直とか、石の上にも三年なんてことわざもありますね。なら、狙います! ヨコハマさんのタイヤもすごく良くなっているし、我々もできる限りの努力をして、ドライバーふたりとともに笑い合いたいですから。最後まで諦めませんよ。